



## 松の成長に触れながら汗する充実感

～ボランティアに聞く現場の魅力～



元日本経済新聞論説委員 兼 編集委員  
オイスカアドバイザー  
小林省太

何が背を押すのだろう。宮城県名取市の海岸林再生プロジェクトの現場に繰り返しやってくるボランティアの人たちの笑顔を見て、よくそう思う。

例えば「チーム草加」。6年前の東日本大震災の後、埼玉県草加市の社会福祉協議会が企画したボランティアのバスツアーに参加したメンバー20人ほどがつくったグループだ。

午前3時、まだ真っ暗な市内の駐車場に集まると車に乗り、北へ向かう。名取に着くのは8時ごろ。ほんの一本ののち、60歳から70過ぎまでの面々が草刈りなどに精を出す姿は、いつも楽しそうに見える。

そのなかの一人、船渡政道さん(60)は農業などをする自営業者だ。震災の後、「ここでボランティアをしなかったら悔いが残る」と、まず岩手県遠野市に行った。それから「月に一回はボランティアに行く」と自分で決め、そういう生活を3年ほど続けた。「チーム草加」の活動もその延長にある。「語弊

があるかもしれないが、非日常を楽しむ気持ちがある」と船渡さんという。「名取では、しっかり働いて役に立ったという実感がある。終われば一杯飲んで、翌日は昔ボランティアをした石巻市や山元町を訪ねたり、観光をしたりして帰る。そうしたすべてを楽しむことで続いているのだと思います」。

東京の三鷹市に住む会社員の井上悦子さん(25)は金曜の仕事を終えると自宅に戻り、長靴や手袋などを持って、また家を出て新宿発仙台行きの夜行バスに乗り込む。出発は午前零時ごろ、仙台着は6時か7時。ボランティアの後は「旅行気分でおいしいものを食べたり面白い店を見つけたりして」、その日の夜には東京行きの夜行バスで帰る。おとしと去年、こうして2度ずつ名取にきた。

震災のときは静岡県で学生生活を送っていた。はじめて参加したボランティア・バスツアーの行き先が名取市の閑上(ゆりあげ)だった。「バスツアーは海岸

林に比べれば楽です。でも、ここの作業には松と向き合っている実感がある」と井上さんという。ボランティアには一人でくる。「淡々と作業するのが好きだし、声をかければ皆さん応えてくれる。この間は終わった後、地元の方に自宅に招かれ、お米やお芋をいただきました」。フェイスブックで知り合いとボランティア活動を報告し合い、それが「次へのエネルギー」になる。井上さんの報告を読んで、山口県から名取まで車で走ってきた人もいた。

海岸林再生プロジェクトのボランティア活動は、毎年4月から11月までほぼ月一回。



手前から3人目が井上さん

去年は延べ1800人が参加した。女性が4割を占める。

風や砂、塩などの害を防ぐ松林づくりは、いってみれば公共事業だ。核になる苗づくりや海岸での苗の植え付けは専門家が担う。しかし、このプロジェクトはボランティアなしでは成り立たない。草刈り、水はけの悪い場所に溝を掘る作業、背丈や幹の太さを測って松の成長を記録する調査……、中身は多様で、鋏をふるい続けるきつい仕事もある。海岸の夏は暑く、秋が深まれば寒い。松を植えれば植えただけ、ボランティアの仕事も増えていく。

参加する人の4割は2度め以上のリピーターだ。その活動は企業や労働組合などの団体によっても支えられている。

「社員に知り合いができて仕事がやりやすくなったという人、自分の会社が好きになったという人、参加者からはいろいろな感想が出ています」。クレジットカード会社の三菱UFJニコスでプロジェクトの支援を担うCSR推進室の柴田和典さん(40)はいう。

ボランティア活動を支援する仕組



三菱UFJニコスの柴田さん

みは企業によってさまざまだが、ニコスは旅費や宿泊費、昼食をすべて会社が負担する。2007年に合併で生まれた歴史の浅い会社のなかで、震災復興にかかわることで社会的な責任を果たす大切さを浸透させるためだという。

もう20回ボランティアを送りこんだが、一回に参加できるのはグループ会社も含めて20人ほど。応募が多くて抽選になることが多い。新しい人、とくに一人では、とためらう人もいるが、最近では、リピーターが新しい人を誘って応募する動きもある。一方では、会社を通さず直接オイスカに申し込み、自費で参加するリピーターもいるという。「社会貢献の大切さが社内に浸透しつつある証明で、ひとつの理想の姿かもしれませんね」と柴田さんという。

海岸林再生の現場には、こうして多様な人々が集まり、汗を流している。「10年後、20年後、私たちが作業をした場所は飛行機からどんなふうに見えるのでしょうか」と船渡さんが思いを馳せれば、井上さんは「育ちながら後世に続いていく松を見ている楽しさにひかれます」。柴田さんは「飽きない現場」といった。「ボランティアには一回きりのものも多いが、ここはどんどん変わりながらずっと続いていく。会社が携わるボランティアのなかで、一番充実感を得られる場所です」。

道路や堤防と違って松林は成長する。松を慈しみ、その将来を想像しながら、「働いた」と実感できる作業をする。ボランティアの人々に、現場の魅力をあらためて教えられた。



私自身(右手前)も度々現場を訪れ作業をする



緑色のピブスが「チーム草加」